

Global Energy Policy Research

GEPR (グローバル・エネルギー・ポリシー・リサーチ) は、日本と世界のエネルギー政策を深く公平に研究し、社会に提言するウェブ上の「仮想シンクタンク」です。この機関は、アゴラ研究所 (<http://agorajp.com/>、東京) が運営し、エネルギー問題についての研究と調査、インターネットでの情報提供、シンポジウムの開催、提言の作成、書籍の出版を行います。

IPCC報告の論点 : 不吉な被害予測はゴミ箱行きに

杉山 大志 · Thursday, September 9th, 2021

IPCCの報告がこの8月に出た

。これは第1部会報告と呼ばれるもので、地球温暖化の科学的知見についてまとめたものだ。何度かに分けて、気になった論点をまとめてゆこう。



artJazz/iStock

まずはCO₂等の排出シナリオについて。これまでCO₂等の排出の多い「RCP8.5」シナリオがIPCCでは頻繁に使われてきた。

だがこのシナリオは、高い経済成長と莫大な石炭消費量を想定したもので、現実との乖離が目立ってきた。諸国がカーボンニュートラルなどと言い出す前だった2019年時点が

ら、特段政策を強化しなくても、2050年時点の排出量はその半分以下に収まる、というのが、いま主流の見方だ（詳しくは拙著「地球温暖化のファクトフルネス」を参照）。

現実には、それほど経済成長は高くないし、また、シェールガス開発などの技術進歩があった。それで世界のCO2排出はそれほど伸びなかったし、今後も伸びそうにないのだ。

それで、今回のIPCC報告の第1章には、「RCP8.5シナリオは実現の可能性が低い」と書いてある：

6 When exploring various climate futures, scenarios with no, or no additional, climate policies are often
7 referred to as ‘baseline’ or ‘reference scenarios’ (Section 1.6.1.1; Annex VII: Glossary). Among the five core
8 scenarios used most in this report, SSP3-7.0 and SSP5-8.5 are explicit ‘no-climate-policy’ scenarios (Gidden
9 et al., 2019; Cross-Chapter Box 1.4, Table 1), assuming a carbon price of zero. These future ‘baseline’
10 scenarios are hence counterfactuals that include less climate policies compared to ‘business-as-usual’
11 scenarios – given that ‘business-as-usual’ scenarios could be understood to imply a continuation of existing
12 climate policies. Generally, future scenarios are meant to cover a broad range of plausible futures, due for
13 example to unforeseen discontinuities in development pathways (Raskin and Swart, 2020), or to large
14 uncertainties in underlying long-term projections of economic drivers (Christensen et al., 2018). However,
15 the likelihood of high emission scenarios such as RCP8.5 or SSP5-8.5 is considered low in light of recent
16 developments in the energy sector (Hausfather and Peters, 2020a, 2020b). Studies that consider possible
17 future emission trends in the absence of additional climate policies, such as the recent IEA 2020 World
18 Energy Outlook ‘stated policy’ scenario (International Energy Agency, 2020), project approximately
19 constant fossil and industrial CO₂ emissions out to 2070, approximately in line with the medium RCP4.5,
20 RCP6.0 and SSP2-4.5 scenarios (Hausfather and Peters, 2020b) and the 2030 global emission levels that are
21 pledged as part of the Nationally Determined Contributions (NDCs) under the Paris Agreement (Section
22 1.2.2; (Fawcett et al., 2015; Rogelj et al., 2016; UNFCCC, 2016; IPCC, 2018). On the other hand, the default
23 concentrations aligned with RCP8.5 or SSP5-8.5 and resulting climate futures derived by ESMS could be
24 reached by lower emission trajectories than RCP8.5 or SSP5-8.5. That is because the uncertainty range on
25 carbon-cycle feedbacks includes stronger feedbacks than assumed in the default derivation of RCP8.5 and
26 SSP5-8.5 concentrations (Ciais et al., 2013; Friedlingstein et al., 2014; Booth et al., 2017; see also Chapter 5,
27 Section 5.4).

これは地味な記述ながら、とても意味深なのだ。

なぜなら、多くの被害予測は、このRCP8.5シナリオの高いCO2排出量を前提として計算しているからだ。

例えば日本の環境省の被害予測

を見ると、不吉な被害予測はみなこのRCP8.5シナリオに基づく計算ばかりだ。

つまりこれらの被害予測は、ありえない前提を使っていたことになる。ということは、政策の検討には使えない。ゴミ箱行きだ。

頑張って計算した研究者には気の毒だが、前提が間違っていたのだから、仕方がない。とりあえず全部撤回して、計算しなおしてもらおうしかない。

1つの報告書が出たということは、議論の終わりではなく、始まりに過ぎない。次回以降も、あれこれ論点を取り上げてゆこう。

次回：「IPCC報告の論点」に続く

【関連記事】

- ・ IPCC報告の論点 : 不吉な被害予測はゴミ箱行きに
- ・ IPCC報告の論点 : 太陽活動の変化は無視できない

- ・ IPCC報告の論点 : 熱すぎるモデル予測はゴミ箱行きに
- ・ IPCC報告の論点 : 海はモデル計算以上にCO2を吸収する
- ・ IPCC報告の論点 : 山火事で昔は寒かったのではないか
- ・ IPCC報告の論点 : 温暖化で大雨は激甚化していない
- ・ IPCC報告の論点 : 大雨は過去の再現も出来ていない
- ・ IPCC報告の論点 : 大雨の増減は場所によりけり
- ・ IPCC報告の論点 : 公害対策で日射が増えて雨も増えた
- ・ IPCC報告の論点 : 猛暑増大以上に酷寒減少という朗報
- ・ IPCC報告の論点 : モデルは北極も南極も熱すぎる
- ・ IPCC報告の論点 : モデルは大気的气温が熱すぎる
- ・ IPCC報告の論点 : モデルはアフリカの旱魃を再現できない
- ・ IPCC報告の論点 : モデルはエルニーニョが長すぎる
- ・ IPCC報告の論点 : 100年規模の気候変動を再現できない
- ・ IPCC報告の論点 : 京都の桜が早く咲く理由は何か
- ・ IPCC報告の論点 : 脱炭素で海面上昇はあまり減らない
- ・ IPCC報告の論点 : 気温は本当に上がるのだろうか
- ・ IPCC報告の論点 : 僅かに気温が上がって問題があるか？
- ・ IPCC報告の論点 : 人類は滅びず温暖化で寿命が伸びた
- ・ IPCC報告の論点 : 書きぶりは怖ろしげだが実態は違う
- ・ IPCC報告の論点 : ハリケーンが温暖化で激甚化はウソ
- ・ IPCC報告の論点 : ホッケースティックはやはり嘘だ
- ・ IPCC報告の論点 : 地域の気候は大きく変化してきた
- ・ IPCC報告の論点 : 日本の気候は大きく変化してきた



クリックするとリンクに飛びます。

「脱炭素」は嘘だらけ

This entry was posted on Thursday, September 9th, 2021 at 7:00 am and is filed under [コラム](#), [地球温暖化](#)

You can follow any responses to this entry through the [Comments \(RSS\)](#) feed. Both comments and pings are currently closed.

